
クロスベルの一番短い日

久湊恋那

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クロスベルの一番短い日

【Nコード】

N2280Q

【作者名】

久湊恋那

【あらすじ】

「英雄伝説 零の軌跡」アフターストーリー。
リベールに帰還する前日、エステルはレンとのお料理教室を計画するが……

「そりゃあもちろん対抗するのよ、対抗！」

「・・・ええつと、何に？」

「ロイドくん一家に！」

その場の勢いと思いつきで初めて使ってみた造語に意外な位しつくり来る味をせしめて、その余韻に浸ることにしばらく気を取られたせいで、あたしは自分の声が予定よりもだいぶん大きくなっていった事に気が付くのにだいぶん時間をかけてしまった。

「・・・なあに、エステル。ナイシヨのお話なんてしないでレンも混ぜてほしいわ。」

というか、アパートのキッチンスペースに向かって料理本のページをパラパラとめくっていたレンが、元々大きな瞳を見開いて更に大きくして丸くして、こつちを振り返るまではまるで気が付けなかった。

「ううん、なんでもない、なんでもないのよ！今そっちに戻るから！・・・もう、ヨシユアはちよつと黙ってて」

「いや、もう明日リベール行きの飛行機に乗る予定で、それで夜までに荷造り済ませなきゃいけないこの状況でいきなり料理始められたら、突っ込みたくもな、」

「レン、何作るか決まった？」

ヨシユアの言い分は綺麗に華麗に優雅に無視して（大げさな表現しただけど割りといつも通りの風景だった）、どうせ呆れてるか溜め息ついてるか開いた口が塞がってないかのどれかなんだからと開き直って反応を確かめもせずにレンのもとへと舞い戻る。

諦めが付くまでに時間を要したかのような少しの間があつて、いつも結局こうなんだからとかそんなような誇張ナシであたしがいままでに100回は聞いたと思う文句を呟きながら、ヨシユアが荷造りを再開する気配を背中拾った。うーん、ごめんヨシユア。

「ねえ、何の話をしていたの？レンの話でしょう？」

「ねえレンってば、それより何作りたいのか教えてよ。ん、むにむに」

後ろからレンの左肩に顎を乗せて、両手でその左右のほっぺを突ついたり、つまんだりする。チーターがスベスベで、レンはフワフワなのだ。

・・・ノリで適当にやっているみたいに見せかけているけれど、本当はどういうタイミングでなら違和感なく実行できるか虎視眈々と狙っていたのよね。これでレンを捕まえたらやってみるぞリスト4 / 158を達成できたわ。・・・次の課題は一緒にトランプかな。

「もう、誤魔化さないで！質問してるのはレンの方なんだから！」
ほったムニムニの件はともかく、質問に質問で返したのはたしかに隠蔽工作の一環だったから、指摘されて自然「う、ばれたか」みたいな表情で応えてしまふ。・・・やっぱりあたし、トランプはやらない方がいいかも。

それはさておき、目の前でレンがフワフワをプクプクにしてあたしをにらんでもやっぱ言い難いのよね。この前ロイド君たちの居る特務支援課分室にお邪魔したら、なんかすごく美味しいボンゴレスパゲティが出てきて、なんかロイド君もエリイさんもランディさんもテイオちゃんもすごく幸せそうで、なんかキーアちゃんが「キーアがロイドと一緒に作ったのー！」とか嬉しそうに言うてて、なんかロイド君はニコニコしながら「そんなことないよキーアが殆どやってくれたんだ」みたいな事言っちゃってて・・・むむむむ。対抗意識燃やしちゃったのー、だなんて。その時はまだレンと再会する前だったからっていうのもあって、余計に。だなんて面と向かって告白するにはちょっと恥ずかしいじゃない。うん。

「・・・レン。エステルはね、この前ロイド君たちの居る特務支援課分室にお邪魔したら、なんかすごく美味しいボンゴレスパゲティが出てき（略）らしいよ？」

「きゃあああああああああ！！」

ヨシユアが、・・・憎いあんちきしょうが、自分のベッド脇の本棚に向かつてクロスベルに捨てていく本とリベールに持って帰る本とを分別して積み上げていく手を休めることさえしないまま、読心術でも使ったのかつて位に正確に、一字一句間違はなく、あたしの複雑な心中をつらつらと読み上げてみせた。

というかこれ、多分さっきの仕打ちに対する復讐よね。あたしの自業自得の可能性が首をもたげてくるなあ、これからはヨシユアにも優しくしようつと。・・・っていう誓いを2日前にも立てたんだったっけ。

「・・・はあ。エステルつてば、そんなことを考えていたの？」

「ううん、ぜんぶあいつの妄想よ。忘れてちょうだい、レン。」
につこり。

「嘘付かないで。ぜんぶエステルの顔に書いてあるわよ」

あんな長い文章全部書いてあつてたまるか！という大人げ無いツツコミは飲み込む。そしてそれを3度目になる質問に変換してから吐き出してみる。

「ところで、レン。どの料理に挑戦するのは決まった？」

幸い、レンは素直に応えてくれた。

「うーん・・・。いろいろ見てみたけど、レンは何でもいいわ。エステルが決めて頂戴」

「え、あたしが？」

今度はこつちが唸る番だった。

とりあえず適当にページを躍らせて、料理本様と相談してみる。

ホットケーキ・・・は、ひっくり返すのが難しいから嫌だし。

カレーライス・・・は毎回、火加減を失敗してるし。

野菜炒め・・・は野菜切るのが大変そうだし、ってあれ？もうあたし何にも作れないんじゃないやあ・・・。

「何よこの本！全然ダメじゃない！」

「いやダメなのはエステルだと思うよ？」

「ダメねえ、エステルは」

「うつ・・・ヨ、ヨシユア！あたしはあんたの為を思っで色々考えてあげてるのよ！？また焦げたハンバーグ食べさせられたいの！？」
「またプライドもへったくれも無い怒り方だね」

やたらと厳しい言葉ばかりがあたしの頭上めがけてばらばらと降ってくる。あたしは何となく決まりが悪くなつて、唇をすぼめて人差し指と人差し指をつんつん・・・する代わりに、レンのスミレ色の髪の毛をふわふわといじくつた。

てつきり嫌がられるかと思つたら、意外にもレンは目を細めて気持ちよさそうに「にゃーん」とか言っちゃっていた。うーん、これをリベールまでお持ち帰りできちゃうのかー、とかしみじみ口に出・・・したらどうせオジサンとか言われるだけなので黙っていた。

・・・オムライスなら得意なんだけど、実を言つとこの機会にあたしも料理のレパトリーを増やしたい、っていう目論見もあつたりするのよねこれが。

「・・・とにかく何でもいいから一品作るわよー。それでウチに口イド君たちを招待して、あたしとレンで作った料理を自慢・・・、じゃなくて食べさせてあげるのよ！」

「ああ、やっぱり僕は最初っから一人で荷造り係確定なんだ・・・まあ動機は不純でもロイドたちを呼ぶのはいいかもね。色々お世話になったし挨拶も兼ねて」

「うんうん、ヨシユアも段々物分りが良くなつてきたじゃない」
「はいはいはい」

返事が一個多いどころの話じゃない。

「あー・・・、ねえレンこれなんかどうかしら。」

あたしの誕生日とレンの年齢をヨシユアの生まれ年で割った数を指すページ・・・とかいうことは全くナシで、その時たまたま開いていたページに印刷された料理の写真を指差してレンの顔色を伺う。
・・・ピーマンの肉詰め。

「嫌よ。レンはピーマン嫌いだもの」

「え、そうなの？」

あたしの戸惑いのシャボン玉を、そこで初めてこっちに振り向いたヨシユアの笑い声が割る。

「あはは、ピーマンっていうか野菜全般が昔から苦手だよ、レン
は。まあ大半が食わず嫌いだけど」

「・・・へー。って、じゃあ殆ど食べられるもの無いじゃない、カレーも野菜炒めもシチューもサンドイッチも野菜入ってるんだから！」

今度は驚きの風船が頭の中に浮かんできて、誰も止めてくれないから言葉と一緒にどんどん膨らんでいってしまう。レンは珍しくもあたしのその勢いにやや気圧されたように、

「べ、別にそんなのレンの勝手じゃない。食べられなくても別に、
・
・
・その、今まで何とかなってきたもの」

言葉尻を濁しながらも反論する。

あたしはそれを見て迷わなかった。本来ならもうちよつと迷うべき
 なんだけど。

でも、
ねえ。

「・・・あたしはレーヴエと違って代わりに食べてあげたりはしないわよ」

•
•
•
•
•
•
•
•
•
○

そう言ったらレンが、・・・あー、うー、なんて言えばいいんだろ
う、うん、何かシヨックを受けた顔になってしまった。というか、
一瞬半べそみたいな表情を作ってしまった。ちよっぴり罪悪感。
「・・・どうして分かったの？」

「うーん、……どうしてだろう。ごめん、何となく」

「………はあ。やっぱりすごいね、エステルは。レンが認めてあげるわ」

・ ・ ・ そうかなあ。

多分今のだったら、あたしじゃなくても分かったと思うのよね。
だからすごいのは、あたしじゃなくてレーヴェなんだよ、レン。

「エステルは手厳しいね」

空っぽになった本棚の埃まで掃除し終えたヨシユアがレンの隣までやって来る。

「少しだったら僕が食べるの手伝ってあげるよ」

昔、食卓であたしにそう言ってくれるまでにはもの凄く複雑な交渉と手順を踏ましてきたくせに、そんな前歴を笑顔一つで安上がり帳消ししてそう言う。

「うふふ、ありがとう。ヨシユア」

あたしはそんなやり取りをする二人を眺めて、次にさっきのページに目を落として。なんだかさつきから、ちょっとだけほくほくとした感情が胸の中に芽吹いてくすぐつたい。

・・・ヨシユアには悪いけれど。

情報処理能力の天才、とか。環境適応力の天才、とか。やっぱり根も葉もない嘘っぱちなんじゃないかしら。

だって、ピーマンが嫌いな天才なんて聞いたことがないもの。

「エステルってば、何をにやにやしてるの？」

微妙にあたしの思考回路を察したらしいレンがすねたように見上げてきた。

「エステル、右手がお留守だよ」

「え？あ、」

包丁は諦めて火加減のお勉強をすることにしたあたしは、無発酵パンを作るべく強力粉と塩と水の他人丼をひたすら掻き回していた。・
・って言ってる時点で、もう普通にあたしのためのお料理教室になっちゃってるわね、これ。

しかも気分転換に窓を開けて、そよ風にふらふら揺れるレンの頭のリボンをボンヤリ眺めていたらそれすら満足に出来なくなっていた。だから、体全部を動かさない仕事は苦手なんだってば。

結局途中から料理チームの一員として動員されていたヨシユアが分担された役割を中断して、さっきまでの時計回りを遂行できていないあたしの右手に注意を促す。あたしは殆ど動きを止めていた右腕

に力を、

「エステル、左手がお留守番してるわよ」

入れようとしたら今度はせっかく在宅していた左腕に注意が行き届かなくなった。

「うわぁー!!」

左手のお役目はボウルを不器用に支えていることだったから、当然のように床に吸い込まれようとしたそれを、あたしの左脇で調味料を漁っていたレン（猫みたいだった）が当然のようにナイスキャッチ。

「うふふ、エステルってば本当にお間抜けさんね」

あたしにボウルを返しながら、レンは何処か満足そうに笑う。

「・・・あー・・・、ごめんなさい・・・」

流石に落ち込みながらレンに謝った。なんか、当初の予定と全然違う。『すごいわエステル、やれば出来るんじゃない』とか言ってもらせるのを想像して一人でにやけていた二時間前が恥ずかしい。思い出して、思わず流しの隅に溜まった小さな水溜りの辺りに視線を逃がす。

というか、ほっぺをつついて髪をいじってリボンに見とれて、どれだけレンに心奪われてるんだろうあたしは。今までの反動、なんて言い訳だけじゃ切り抜け難い醜態じゃないの。視線をレンの顔に強制送還させて、そういう意味も込めてもう一度謝ろうとした時、レンが少し不自然なタイミングで口を開く。

「まあ、こういう時くらいはレンがいなくちゃダメってことね」

自然と、一瞬呼吸ごと動きを止めるという不自然な行動に出してしまった。

違うのに。

こういう時だけじゃないのに。

いつだってあたしはレンがいなくちゃダメだよ。

そう言い返せばいいのに、今それをしててもレンには伝わらないってことを、絶対、絶対に、伝わらないんだってことを、よく分かって

もいた。

だから消化不良で、悲しみだけが残った。

どうしてだろう。レンってば、勘違いしてるのよ。

あたしは別に、辛い思いをしたレンに救いの手を差し伸べたくて琥珀の塔にアクシスピラーに帝国にクロスベルに、捜しにきたんじゃないんだよ。

あたしレンのことが好きなの。

結社にいて欲しくない、なんていうのもただのエゴなの。

たとえ結社がとっても幸せな場所で人殺し集団なんてのも嘘っぱちで実はみんなレンのことを大事にしてくれる家族で友達でレンはそこではお姫様で本当に本当の意味で世界一幸せで、

それでもあたしは多分嫌で、レンに傍にいて欲しくて、一緒にお喋りしたり遊んだりしたくて。

それだけなのにな。

・・・うん、でも大丈夫よ。絶対にいつか、引つ叩いてでもそれを信じさせてあげるんだから。

そんな思考を巡らせながら窓の外に目を向ける。夕焼け空だった。

綺麗なオレンジ色が夕闇に溶け込んであたしの目を洗う。

数日前の、アルモリカ古道の遺跡でしゃがみこんでヨシユアと眺めた、同じクロスベルの夕日を自然と思い出す。レンに会いたいと思っていた。ヨシユアが手を握っていてくれた。ロイド君たちが来てくれた。

もう一度、思い出から今日の前にある夕焼けにピントを合わせる。

あの日と同じ空に見えるのに隣を見たらレンが居た。

・・・うん。何とかなる。

大丈夫だ。

「よし、あたし、ふっかーつつー!!」

『大丈夫』の証拠に、元気良く叫んでみた。

「・・・?」

レンが不思議そうにこっちを見る。

やっぱり顎をなでたらゴロゴロって言うのかしら。

「安心したよ」

ヨシユアはやわらかく微笑んでくれた。あ、ひょっとして心配かけてたのかな。

「いつも通りで」

音を立ててボウルが床と衝突して、中身が全部ぶちまけられた。

「・・・ええつと、エステルはどうしたんだ？」

「ああ、気にしないでいいよ、ロイド。いつもの事だから」

「あー、ロイド君たちを羨ましがらせる大作戦がああ・・・」

「？」

結局失敗した。作り直そうにも時間がもう無かったし。

ぜんぜん大丈夫じゃないわよ、あたし・・・うう。完全に空回りだ。ああもう、恥ずかしいなあ。

で、それなのにわざわざこつちまで来てもらうのも変な話、ってことであたしとヨシユアは、明日リベールに出発することをロイド君たちに報告するため特務支援課の分室まで足を運んでいた。

「レンも来てくれればよかったのに」

「まだちよつと決まりが悪いみたいでさ」

ヨシユアたちのやり取りを見ながら一人で落ち込んでいたら、丁度二階から降りてきたランディさんと目が合う。

「おつ、エステルちゃんたちじゃんか！元気だったか？」

・・・支援課の人たちはみんな愛想がいいなあ。

「うん、お陰様で。えつと、そういえばキーアちゃんは？」

いつも元気いっぱいにお出迎えしてくるキーアちゃん（ご機嫌が最高潮の日はタツクルのオマケ付き）の姿が見当たらないので気になる。・・・そういえばティオちゃんとエリイさんも居ないみたいだ。

「え？・・・あー、いや、えーつと・・・。なはは。今キー坊はちよつと取り込み中っつーか・・・」

いつも豪快なしゃべり方をするランディさんの歯切れが何となく悪

い。

すると、ヨシユアと話していたロイド君が何故か、少し慌てた雰囲気を感じながらこつちを振り返る。その顔に漫画みたいな汗マークがぶら下がっているのを見逃さない。拳動が微妙にスローモーシヨンなのもあたしが感じる違和感に拍車をかける。

「えっと、エステル、キーアのことなら気にしないで・・・」

「ロイド君、何か隠してない？」

「う、」

うん。あたし、ロイド君とだったらトランプでも勝負になるかもしれない。

「あー！ー！！エステルたち、来てたのー！っ！ー！！！」

「だー！ー！ー！っ！ー！！キー坊、待てっ！お座り！お手！」

あ、なんだ。キーアちゃん二階に居たのね。・・・ロイドくんもランディさんも何をそんなに必死になって隠してるんだか。

キーアちゃんがどたとと二段飛ばしで階段を駆け下りて来る音で、最大限に自己主張してくる。

「キーアちゃん、久しぶりー！・・・え？」

あれ？

レンって今、アパートに残ってるはずよね？なのに何でこんなところに居るの？

咄嗟にそんなことを思った。

でもそんなわけがない。現在進行形であたしにタックルをかますのは真正正銘、キーアちゃんだ。・・・リボンがいつぱいあしらわれた、真っ白なフリフリのドレスを着た。

「ぐあ、見られちゃったか・・・」

ランディさんがその場にしゃがみこんで頭を抱え、アガット顔負けの赤毛をぐしゃぐしゃと掻き混ぜる。

・・・えーっと、これって・・・どういうこと？

いつもの二割り増しの勢いでキーアちゃんに突撃されたせいで実は吹っ飛ばされて尻餅をつかされていたことを差し引いても、思考の

足取りがおぼつかなさすぎて纏まらない。

「ねえー、エリィ、ティオー！ やっぱりこの服、動きづらいー！ ！」

キーアちゃんが可愛らしい顔とは相容れない抗議の声を上げて、今駆け下りてきた階段の方を振り返った。その頭にリボンまで発見する。

「エ、エステルさん……えーっとね、これはその……ぐ、偶然なの。おほほほ」

「エリイさんからなんかギクシャクした笑みを貰ってしまった。
エステルさん。」「

ティオちゃんに至っては困ったような顔をして黙り込んでしまう。
・ ・ 何故かこっちが悪いことをしている気分になった。あ、目を逸らされた。

「ああもう、
恥ずかしいなあ」

テイオちゃんの沈黙をロイド君が溜め息と赤面で引き継ぐ。

あ、ロイド君今、鏡みたいだ。ちょっと時差があるけれど。

そう思った瞬間、やっとこの状況の意味がずっと飲み込めて。

「あ……あはは……えっと」

どうしよう。言いたい事がたくさんある。でもどれから言葉にすればいいんだろう。

さつきまでとは全然違う意味で恥ずかしくなつてあたしはうつむく一人だけ今の複雑を理解できていない、きよとしたキーアちゃんと目が合う。そのドレス姿を改めて見直してまた恥ずかしくなる。「ロイド」

そのままのポーズでもそれが誰の声かは分かったんだけど、でも顔を上げる。だって、このままキーアちゃんを見詰め続けてたら顔を沸騰するよ・・・。

顔を上げるとロイド君の名前を呼んだヨシユアが、恋する乙女としての意見をここで言わせてもらえるなら百点満点の嫌味が全く無い

綺麗な笑顔を浮かべていた。

「ロイド、ありがとう」

・・・ヨシユア、えらい。かんぺき。

「え？いやお礼を言われるようなことは俺達、全然・・・」

「そ、そうよ。むしろごめんなさい。その、なんと云うかこんな・・・、あからさまな、というか・・・」

「ありていに言えば、パクリですね。すみません」

「いやテイオすけ、お前はいさぎよすぎだから」

ヨシユアの一言のお陰で火照りの消えた気分で、あたしを押し倒した体勢のまま不思議そうにロイド君たちを眺めるキーアちゃんに視線を戻す。

この子、天使みたいだ。

こんなにも簡単に、人に幸せを運んでくれるなんて。

だけどごめんね、あたし今すぐに帰らなくちゃ。

一秒でも早く、レンの顔が見たくなっちゃったもの。

（後書き）

ここまで読んでくださりありがとうございます。
初の二次創作で少々緊張しております・・・
よろしければ掲示板にてご意見ご感想をどうぞ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2280q/>

クロスベルの一番短い日

2011年6月16日03時02分発行